

王子：熊野古道沿いの諸神社

王子社は熊野三山の御子神を祀る諸神社でした。王子社は参詣道沿いに立っており、その中には簡素な拝所だったものもあれば、疲れた参詣者のために宿泊施設に加えて風呂まで提供したものもありました。都と那智大滝の間には多くの王子社がありました。これらは（正確な数ではないものの）一般に「九十九王子」と呼ばれました。

王子社の成り立ち

王子とは prince という意味で、王子社に祀られていた神々は熊野三山の祭神の子どもとされていました。

王子社の成り立ちは史料や古典から伺い知ることができます。増基という僧が残した 10 世紀の紀行文には、「木のもとごとに」手向の神があると記されています。おそらく、王子社の前身は地元の修験者によって創設・保守されたこれらの手向の神だったのでしょう。12 世紀までには、熊野詣の記録に何十もの王子社の名前が現れるようになりました。

1868 年の明治維新後、新政府が神道と仏教の厳密な分離を命じた結果、王子社は新しい名前を付けられ独立した神社となりました。王子社の時代は終わりましたが、今日でもその多くが地域の信仰の拠点として存在し続けています。

多富気王子

多富気王子は大門坂のそばにありました。江戸時代（1603–1867）までには、多富気王子は中辺路参詣道で那智山に最も近い王子としてよく知られていました。この王子社は、中世の熊野詣の手引書に載っている王子社一覧のどれにも含まれていないため、研究者は多富気王子が比較的后期まで本来の手向の神としての性格を保っていたのではないかと考えています。

市野々王子

12 世紀初期の巡礼記に登場する市野々王子は、おそらく熊野で最も古い王子社のひとつです。この王子社は 500 年前に制作された『那智参詣曼荼羅』という絵画にも描かれており、中世後期までには中辺路で那智山に二番目に近い王子社として知られていました。「市」とは market という意味なので、市野々王子は市場としての役割を兼ねていたのかもしれません。

現在、市野々王子は市野々王子神社と呼ばれる村社です。しかし、この神社が立っているのがもとの市野々王子と同じ場所であるかについては議論があります。100メートルほど離れたところに、お杉社と呼ばれる神聖な一角があります。お杉社には古い礎石と、御神体（神が宿るとされる物体）であるかつて太陽の女神である天照大御神が降臨したと伝えられる石があります。本来、市野々王子はこの場所にあったと伝えられています。

浜の宮王子

中世、浜の宮王子は補陀落の浜と広い海で謳われていました。浜の宮王子は隣接する補陀洛山寺と一体の社寺複合施設を形成していましたが、そのつながりは19世紀に断ち切られました。浜の宮王子は熊野三所大神社と改称されました。

浜の宮王子は本殿に熊野三所権現を祀っており、二社の摂社も擁しています。片方の摂社は熊野に上陸した初代神武天皇に抗戦し敗北した丹敷戸畔を祀っており、もう一社は食と稲作の神である御食津神（三狐神）を祀っています。